

疫病除之藥

×

e 4

499.7  
EK

No. 1374  
14. e 4



富士川文庫

3367



● 疫病除の茶

物比ふあまのり希るを傳

毎年九月四日百首のまゝ其日一日干したる茶に其夜  
一宿半一夜中病中當テ夜に飲むは凶能也  
其茶を三日に九日又三日に毎干して三日を  
病らるるを

九 七葉一酒ヲ入茶碗水 五又入

セドドハ申さる右茶を焼チ給ル也  
但つゝ出る茶は又水茶をハカシ七入

● 山吹虫の茶

世に 蜂のぬけがらをセドド七夜の角にのほせり  
ききり同に茶又十の茶を直ハ茶茶の着て飲

499,7  
EK

No. 1394  
14. e 4



富士川文庫

3367



# ● 疫病除の茶

物比ふあまのり希るを傳へ

毎年九月四日、百首のまゝ其日一日干したるを、其夜  
一夜半、夜中病中書テ目と銘元凶能包みあて  
其首を三日に九出と又日々に毎干し上り、毎日其を  
湯で煮し、湯茶を飲み、若くは病中より湯を  
れ、湯茶を飲ト、湯茶一盃ヲ入、湯茶碗、水、玉子入  
セ、下ドハ申ス、右玉子焼チ給ル也

但つゝ、出る茶、且又湯茶、ハカシ、モ入、テ

# ● 山吹虫の茶

世に  
蜂のぬけがら、まを、下ドセ、夜、の角、の、ほ、せ、ん、え  
き、を、同、に、水、成、又、十、分、を、追、ハ、湯、茶、の、着、て、飲

茶を氣根まで切らぬ

料

● 申うりのの又法  
物漬のなかりに浸すに上とふそ後日  
干上り又るらうこけ能干上り  
粉じしとらひぬ

● きやうありの茶

若右ののるもあ達し。后粉じし水を  
井戸かみ上り内酌のまゝと茶を  
水から茶の粉とを吞べし是れ茶也

● おせの子見ようのま

おせの子見ようのま  
おせの子見ようのま

口少くははまき有り 隘分をけぬ茶も  
口を明き又ま少く能るぬあつま  
まそ月のおありの之是れ山奥茶の傳也

● 毛法を止す法

毛法を止す法  
油をこす  
又毛法を止す法

● 物の茶をこす法

くもの茶をこす法  
水に浸す法

右の葉の形又その色に似てあまぐしと葉を煮て  
辛く煮し 蛤とササ子のりく大飲せよ也

● 歯みぐしの法 若林孝の法

磨粉 肉桂 丁子 中佐 中佐

古四味細末を末ノ一ツに徳を煮て徳を又又

笑入て徳を煮し 又くげんまぐし 徳を煮て徳を又又

但右の葉を煮し 又くげんまぐし 徳を煮て徳を又又

料 ● 蓮葉田葉の法 中川孝の法

蓮の葉を煮て徳を煮し 又くげんまぐし 徳を煮て徳を又又

● 蜂石指児

いぶきふみくしを煮し 又くげんまぐし 徳を煮て徳を又又

● 狐おとしの法

市谷柳町 葉を煮し 又くげんまぐし 徳を煮て徳を又又

但此を煮し 又くげんまぐし 徳を煮て徳を又又

又その法代の子は由

昔より人の口を治すに八限あり 口を治すに八限あり

● 疝疝、妙業、甲比、使本、車、傳、秘

一むきくのみ、或、母、一、紅、花、を、水

ノ、味

古、く、身、を、た、の、う、げ、ん、せ、ん、で、七、日、用、す

但、病、後、有、り、人、を、た、り、用、す、の、よ、り

● 咳、お、疾、由、去、田、生、房、瘡

古、く、外、の、山、を、ま、お、妙、湯、赤、田、湯、合、若、ら、若、

地、を、煎、す、之、を、サ、リ、し、茶、湯、也

但、是、ハ、伊、豆、を、入、り、ん、ぐ、ん、を、茶、禪、と、出、場、と、し、又、  
及、後、九、二、年、さ、り、又、口、を、こ、ん、な、ト、ヤ、ホ、セ、ガ、シ、又

知、ら、ず、ぬ、出、場、と、サ、リ、

● 百日、咳、の、妙、業、又、ろ、と、ま、と、ら、ふ、を、ま、ま、と、し、て、  
夜、を、ま、ま、と、し、て、ま、ま、と、し、て、

三、丈、婦、有、り、その、他、手、ぬ、り、つ、ぐ、を

● 咳、お、せ、ぬ、又、兎、山、石、川、春、日、所、可、弓、原、  
増、卵、も、あ、る、と、い、ふ、と、い、ふ、也、

毎、月、二、日、之、に、上、を、煎、す、上、を、て、茶、湯、也

の、お、お、交、る、半、年、ぬ、ら、の、也、又、方、西、月、の、ま、ま、と、し、  
馬、馬、ど、し、と、い、ふ、也、

但、一、二、日、ヲ、こ、も、り、時、ハ、た、ら、ず、上、る、也

● 婦、人、巡、り、去、又、陰、狂、お、ま、を、二、三、月

胃、月、位、を、あ、ま、り、リ、茶

クジキニ由

湯浮天神男坂下公山城道下出り四

中国坊隣ク由註申由公長家より

出ス丸茶一包代百の由植村手まらるるを

料

● 浅草のり野少法

又ニ石川中ノ根ノ水川ノ其又成爲ヲ指シトナリ

ういそとらも只の茶も五りり茶手終りて  
世茶なる石海若を能中めうてうかめをづ  
た風いぬうさいうさづー是付也

● いまおの茶 人とも用る茶 岩尾ひらるる

物の肉 豆砂 人参 茶味終りしはせ

春るべー是くぬ茶なるり

● 切し類上人全限茶の法

煮りより膏を入 茶がの志り汁なる  
往々とき足る所づー 付植村りめん茶は  
在茶而ある茶  
の茶手茶のり

● 人のゆがみ

毎月辛おの土より日家の内のある

下の土をきて後につく対をてん  
それバニ茶年の因る人をとて  
いづらひし 又右の土をひびく場

おかり成るる

● ちぢ茶 文化土前年十月下旬  
四谷右衛門下茶代を向るる  
大茶法を伝授也

の月すく 丁子 恒に法を伝るる

りりるみせの付こ

● <sup>并</sup> 川町ん 補り

何成と一驚 着るべき 酒の味

西申とニツ 水と四ツ 併入あひ 雑合るも 羊群ん ちもし 什とるも 分料 着る支入能く

木酒おき 油水ヲ示入是 糖と也

うき(は)せ まの 火こくけく 糖と也

但より補きこゝ 時まるハ湯を之 煎じ

何時止ぬても望ツぬ 又形し

● <sup>せんき</sup> 疾 於 拂 兼

角くもあきく じんぞふ 右南がまき

せんぞう

● 腰 足 痛 下 汁 ぬ 兼

せんき 腰 足 痛 下 汁 ぬ 兼 かんき

心もいごの 皮をむき 股のてな 年 たり 正申

身 残 下 ぐ ぬ ぬ ぬ 今 なら 其 風味 さいじ

焼 たる 石 遠 白ひも 目 とも 八 子 代 年 申 中 以

申 自分 とも 井山 成 とも ま ぬ ち 是 だ 経 多 経 多

去 卯 とも 年 人 急 ち しく 人 多 とも ぬ ぬ ち ち ち

但 養 骨 糖 の 大 ン 腹 赤 基 ナ が 南 ト 小 ぬ ち

兼 養 骨 の ぬ ぬ ぬ 又 う ち ち ぬ ぬ ぬ ぬ

● 痔 の ぬ ぬ ぬ

亀 ち 老 年 下 妊 下 ち ぬ せ ち 及 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ



# ● 安産の児

又毎半年一テせがきよ上ヤウ  
蓮服を包テ儲くるコトト版字入  
メテあぐーけがらしく安産也

一 京大板ぶる大いさる元アヤとんたをいし出イハ  
まりこし木チ表まきとせすれ又入まを産する  
的あぶし安産也

但右よりこぎハガもひりしるハ一切ま  
すじせせもッ分さやせま一と用  
あしる

● 加持の上より一 ちがふ  
まうりん

あふち川格向授了ら京大下ヤ所る

あふち川格向授了ら京大下ヤ所る

三 畑平上上事一文化土成年をいし出

但人ハ洞志んちの品と湯茶ツセ中々人甚大毒  
あしる

# ● ありふるチ安産法

物りいすまてる當人分りあ ちりや何チむもぬ同

児に舞々赤子泣きこころのみと洗イ法にてよそく

三 中ありテまきあり  
児子人目の月まきり  
あうが伏  
あしる

其のこころ南人ハ竹葉年一と度児人まきこころ

是又ちんをこまきありぬとちの終てり

みいこころいし火入物しハもちくとち物ト事速

まらぬ物り但ちより出まきり  
出まきり  
あしる

● のんごぞげぬまの信(又ちの月ト枕まきり)

よくてし其の葉チせそそのむしぬける

● つんどの用はそれらの茶の用は切茶

茶らんがふ羽近し茶キガキ 正徳下にてさ申

あて吾づし妙茶あり 林村年よりまき隠居は

● 醫者者如上也有りふの事

加吉良元といふて文化年中の以半世結中茶返茶

其後を新田 将完といふ事一付以

軍中余の医者有るなり 林村年よりを才者といふ

付く 茶はすはは

● 洗ひ粉は妙茶

飲后の粉を粉じて茶をぐく 茶上

● 元は梅の茶

茶のかわりに目きりのていへば茶を押し

包水く押しは茶を濃血を残り茶

● 大に喰をれは茶茶あぶりの茶あり

早速茶種をらとこ袖を茶を茶を

せ中がわし茶をのし又はせ△ては陽を

茶を茶を茶を茶を茶を茶を茶を

● 田舎の茶

極よくの樟脳をそくいづ茶あしぐと水入

ときをく包し

又、おていもて有る時ハ洗ひ押し茶

おつめりたるし人の茶の茶の茶

● 烟入さきねし形細子入

茶山懸之傳

文化年中一山懸傳世と云ふ茶山を以て記  
此茶津怪物中と云ふ茶山を以て記  
二下流力二日月ガリと云ふ茶山を以て記  
岩底以而志云と云ふ文化十三年四月首  
十一廿日

● 玉ぬるしの能の改書

むめりい  
正名吳也

是ハ石名丸の如し玉ぬるしの能上と云ふ之是ヲ  
由是定まらざるもの石名丸の由代なる今云ふ如く  
世より此水ぞくまけく又お身之痛と酒と解  
けり

● 通じ茶

又方竹の終天てより  
又方大根をかりけり上は山懸を以てハチリと云ふ也

概して此茶の如くはト不もハおろく人きりりの  
題に用ゝる茶の如し松茶をかりて絶少なる人茶と  
云ふ

● 今こそくも茶の傳

昔はくも茶は極上の茶がらうまおを入し  
能く入るは是れ茶の如くはくも茶はよくかき  
時今こそくも茶は上より今こそくも茶はよく  
おろく

● 引風の耐紙の如く茶の如く

そば粉の如く茶の如くは白砂糖  
を以て入るは茶の如くはくも茶の如く

●おざり装束兼道真大菩薩

五法河橋を東のなるへ橋り北より二三町目  
古き屋敷をあらうと妻をいしに主匠ヤリ  
もろ主介をテ修くがり舟上り多り  
又久上るおしりハ久松河堤橋通り中  
大尾屋敷をあらうと妻をいしに主匠ヤリ  
又道りして芝口三丁目有る大尾屋敷をあらう  
又目白坂中松小をいしに細之入り

●雷除の法

山谷淨生院満谷和尚口授雷除咒文

阿伽陀 あきやど 刹帝魯 せつていろ 須陀皇 しゆだぐわう 彌陀摩尼 みやだまに

くらんくわらひあん

きんきうくらひあん

愚道之法孫 ぐだうのりやくせん

謹刻 湯川姓 弘道

●年中張茶入吹州茶

文化上 延享七年七月  
湯川姓 弘道

毎年八月より 煎茶を山と大父に 水と斗入し  
中井もやぶが法は 水斗を彫を四半より 梅何  
茶も入テ茶ぶし 其茶極別 切能高あ能  
切能中あ多し 右何茶の中もあし入交  
て用るし

●腰お彫物原を形ヲ押し去るニふた百は  
 ちんじの虫をキヨミ去トヤカを足ヲ移リ  
 目おき其節を押ししけち大付馬丁結の目や  
 村田守法を有く

●中歯痛に用テる法

又方湯浴平目こめ物をら  
 又方湯浴平目こめ物をら  
 村田守法を有く

●又方  
 火の中へ神ぎの符ヲ入ル  
 火の中へ神ぎの符ヲ入ル  
 火の中へ神ぎの符ヲ入ル  
 火の中へ神ぎの符ヲ入ル

●又方

●又方  
 又方湯浴平目此を  
 又方湯浴平目此を

神ノ水ヲ入火入中へ

●又方  
 又方湯浴平目此を  
 又方湯浴平目此を

●又方  
 又方湯浴平目此を  
 又方湯浴平目此を

以好もじんがう神一好も亦きふいあう也  
又山を麻も彼神一太極の物也如氏と一  
り時ハ其の家もじんがう神一交るる事自然と  
万事が合宜福まらぬ物也

又  
法華法三を目 九十五有丹後山行世秘に内お木の皮  
お木村らぐの味とよふらかの神也  
日七十九も有る細く事  
好古まの流の内八十口有る大國天の事  
淵瀬物語の内八口有る地福和合神の事  
妙茶快武百六十九も有る口帳百九十九有  
口帳二百五十九神事事の事一に二百七十五ノ度もちに

● 実眼つきめの妙茶

白砥あらい石の粉細末して乳ちを解する妙茶也

● 白雪の茶 又桃の皮をせんぼをたし

正月の餅もち青クハむとマ思おも焼やして研ひる解とす  
際ニ三皮さんをいれバ也

● 古ふる下したネね茶ち物ものと一いつ時とき 又信昆布思焼とくむ  
はし

あうらあうらいいぞぞの根ねヲ其根の大ナおほナな根ねをくくいい押お交あせ  
其の古ふるめめままままどど法はをを妙め茶ち也

● 古ふる下したネね茶ち

かきくも凡の根ヲ能千多て細末しごふの  
抽ら解身。若又日ヲ経りりきるぶの粉ヲ  
少こ更テトシ

料

● 卵め物 羽田庄たまたまを三付の秘し

赤みそヲ能まじり [REDACTED] 廿中へあそのこ

きりか くらみ 廿三味ヲ能細きばら能交せて  
是をさそふみ川らあの也ときる味味是

● 持茶せりまき 田沃久たまたまを三付

馬ご飯を升出てはれがさきめく兒ハ茶ヲかこ入まじりあり  
さんや 唐うまう 白口豆 糸十六分 白砂糖粉一本

焼塩平紙入をチ何しも粉してさあそくはる  
のもり粉あり 都合七味也

但サテ揚ちるまじりし 煎りてはるり割合まきれ揚り  
じふ二合五分トをこし さんやく 夜うまう 白ありまあ  
吾付四味まを月らま 白砂糖粉一本 焼塩の割合は

● 海らまき換したらぬく候

本道の山口の水をきりまき換らる字の市上平  
上下白紙をらりて木座の山口水をきりまき換らる  
白紙をちぬくし 尤上りの紙にまき換らるのみの紙  
紙をきりまき換らるてくらん

● 朱をきりまき換らるはやくし 仕込める水をきりまき換らる

右に本道がよし 是ハ朱をきりまき換らるて結をりる

時多きまきつゝぬめてまゐる右の本道の山にて  
朱硯の中を徒こぼりまゐる湯あきまふべし  
おもしろやうくおもしろの也

● 名ぞにびの事

是ハ惟まらぬとて用ゝに也町紋の服も出  
こまゝくの如くぬゝあては是ヲおもひ又然らぬ  
こゝろしりハさ中のでこゝろこゝろハ竹くもぬ  
徳りりしぬれぬもりの也但是ハ松をかりん  
此後其外ハ後人とも有

● 止菌茶の事

文化十一年十月五日の書  
中村ハ十年を信

松のみどり但みどりの事付ハ正桃の梅干

六武系南がしりて又能く水しぬあし  
貯へる常よぬは岸一合合若く後うぐい伝  
一生岸痛のうぬの形し

● 浪焼舟の傳

小石川テ時所運るつ糸  
繪をせたる傳

あんちり洞の美列好く能みぐままふ炭  
能とまう上テ能あまして苗こゝろこゝろ能みぐま  
まふ物能を能まう付其上ハ水くゆび  
少てまう付其上ハ浪まうこゝろこゝろし是廠人  
能信申 但海干チまうり能てもままらぬ  
又水くハ山をハ西く少くおびて  
まうこゝろこゝろまうこゝろ



三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

● 絞さや 并本花ろし流き出せ法  
海らろハ焼油、少許上粉の糖、交せもこ  
と流しこぎこしら也つや能出るす  
石粉の石又ハ絞ホハむくの玉どく絞も石  
ろろくとき出る

● 本根めまきる也。又能はや出る後  
本搦のちも何本あより流き出せ  
切しこ包能念入てこよりり  
少らら石流き出せ也



● 本月の日の正トチアク新

大七 中下新し 今月大の月ハ

右大の月の新し 子日あまきバ 本月朔日チ新し

是准して小の月ハ 本月朔日チ新し

是の月の新日まの目あれハ 本月朔日ハ辰ト新

● 中氣大め業 又方 後ハ春ら二万石松年値多し  
文化年中第あり美林彦悦  
谷多クし

中本場茶店 茶屋  
仲之右洞リ 本年中氣大日ハ

用ははも然ま九ころし月り

ははまのせんりし月り

痺筋 へんきん



男子ハたより  
血ヲ取初ル  
右のほうより  
引いて来ル

お灸

寸尺ハえんハ白キ  
えん筋がよ



お灸

お灸△  
お灸△  
お灸△

下の灸

灸の法

通人よりおびのおし  
すすは是ヲ灸ておび  
おび筋がよ

一ト児十五才近五痺の名久火にて竹を成痺病は  
不治トシテ幸平おびし金細糸に死むるなり

一帯の如く小児を帯んとかしこまはりひもを帯んと  
してらたえまが白キえん筋をん帯の帯のどとく

帯の如く小児を帯んとかしこまはりひもを帯んと  
してらたえまが白キえん筋をん帯の帯のどとく

帯の如く小児を帯んとかしこまはりひもを帯んと  
してらたえまが白キえん筋をん帯の帯のどとく

帯の如く小児を帯んとかしこまはりひもを帯んと  
してらたえまが白キえん筋をん帯の帯のどとく

帯の如く小児を帯んとかしこまはりひもを帯んと  
してらたえまが白キえん筋をん帯の帯のどとく

帯の如く小児を帯んとかしこまはりひもを帯んとしてらたえまが白キえん筋をん帯の帯のどとく

きうじびのそらぎとくきう、膏テまぶ胎のどく  
た衣（よ）まきとくし、何止も灸灸をて所へ  
十五火、くまへり也

一、灸育く、子の海、筋より血を、灸奉、部合

ニ、灸、く、三、灸、目、注、る、灸、点、く、灸、又、血、を

三、灸、く、本、筋、行、り、男子、ハ、た、か、た、筋、ノ、注、ら

右、く、血、を、取、り、但、実、く、り、穴、より、出、り、け、ハ

何、灸、も、血、を、志、り、重、た、病、注、す、種、血、多、く、出、り

一、寸、尺、ヲ、注、ハ、白、元、結、が、よ

一、灸、上、灸、く、し、り、て、も、而、灸、成、日、ク、又、ハ、宅、ら、元、灸、ハ

幸、り、く、が、灸、日、く、て、も、を、一、灸、灸、ハ、二、寸、半、灸、

一、忌、中、又、ハ、膝、中、ら、も、持、あ

一、寸、を、灸、く、り、元、結、ハ、物、持、ぐ

一、乳、ヲ、灸、く、り、汗、ハ、言、伝、入、ぐ

一、眼、病、の、特、え、後、日、も、灸、く、た、く、灸、馬、灸、

一、何、し、く、灸、眼、ノ、内、り、

一、方、上、灸、く、一、又、右、目、灸、

一、右、目、灸、ハ、左、目、灸、ハ、灸、

一、世、懐、百、二十、六、灸、月、も、灸、

一、お、く、の、灸、灸、を、灸、



灸のどく、い、お、び、の、灸、の、

但、法、ハ、市、布、洋、井、液、向、日、灸、  
羊、布、を、灸、く、右、目、灸、ハ、注、し、  
り、た、く、灸、の、に、村、灸、ハ、大、灸、村、灸、

三葉が枝

●ぬいりよりし法

糸類ハ竹系何れにしてもぬいりよぬいりよぬいりよ  
丸金糸并大糸糸すしぬいりハゆせ糸とらふ  
金糸ハかばぬいりのぬいり糸と是のなりきし  
能千上きてもよ

竹木の葉よりぬいり糸又ハひよりしぎ糸並に  
水ヲほぬいりハ大糸二筋并てゆせ糸とらふなり  
但ちち竹糸とてしより申テぬいりハ思しよりし  
掛る糸のはやぶ玉

一切のよりぬいり上してすりすすすぬいりよ  
のきりのきりぬいりよりし能千上  
わくよりしすすす

下段ハ氷ヲ入糸の糸おろしに書る也  
地の切ハた右よりしぬいりぬいり  
ぬいりハ上よりハたりぬいり汁ヲまひ右の糸ハ  
下段入糸巾汁上ハ実出るぬいり  
能ハ糸糸の糸ハぬいりぬいり糸ハ  
糸の糸ヲさくりの糸ハ

●信生遠くゆき

赤山ニゆき糸ハ白撥了

赤山糸ハ白撥了  
糸ハ糸ハ白撥了  
糸ハ糸ハ白撥了

又信生糸の折糸ハ  
糸ハ白撥了  
糸ハ白撥了

● 小見 人足 あし 知 しる けり と あり と けり と けり と けり

一 ハニ 金 ご 形 が 守 まも り 止 と 止 と り 止 と り 止 と り 止 と り 止

料

● 料理用 焼物 煮物 焼る 旨 洗き 煮る 焼る 旨

焼物 煮物 焼る 旨 洗き 煮る 焼る 旨  
 のまじ 向 向 向 向 向 向 向 向 向 向  
 ま 又 又 又 又 又 又 又 又 又 又  
 通 上 上 上 上 上 上 上 上 上 上  
 川 石 石 石 石 石 石 石 石 石 石

形 形 形 形 形 形 形 形 形 形  
 ま 又 又 又 又 又 又 又 又 又 又  
 通 上 上 上 上 上 上 上 上 上 上  
 川 石 石 石 石 石 石 石 石 石 石

● 飲 材 散 散 散 散 散 散 散 散 散 散

菓子 昆布 能 能 能 能 能 能 能 能 能 能  
 ヤ げ ん ぞ ぶ び び び び び び び び  
 細 末 末 末 末 末 末 末 末 末 末

但 昆布 昆布 昆布 昆布 昆布 昆布 昆布 昆布 昆布 昆布  
昆布 昆布 昆布 昆布 昆布 昆布 昆布 昆布 昆布 昆布

菓子 昆布 昆布 昆布 昆布 昆布 昆布 昆布 昆布 昆布  
 え 採 採 採 採 採 採 採 採 採 採  
 志 の り 志 の り 志 の り 志 の り 志 の り 志 の り 志 の り 志 の り 志 の り



新製 欖拵散

一才一粒氣を油瘡を解し能血を治め  
腰内を治す能中の油を  
其徳多し

文化三十一年正月半田氏製

竹筒、曲又ハ  
燒おホ、倍々

代  
三十二個△  
四十八個△  
百個○  
相下ス

秘法

席淨煙 半田氏製

何ふく、すふ淨煙考自いひて  
子連もあぶり、火おきけす  
少く又入り、あきま  
一也、後考を止る事少なり

席淨煙の法代十六例

少量ヲ細末し其中一干し  
振の葉ヲ細末し沙合を交へ

● 暑にそぢられ食も不通言施し、  
寒にそぢられ食も不通言施し、  
其付葉を、  
押りて、  
油を、

さふヲ考えて申へ、  
みぢたれ、  
べし、  
又、  
但、  
是れ、  
又、

● 油を除け

木、油出附、  
湯、枝、

奇妙あり

● 足の指の如くみおさぬ児

遠くよりおらざらん足の子をたに <sup>キリ</sup> 鍾トに少くおもて  
書てりべし <sup>イ</sup>妙あり

● 初イけり化イゆるの年イ 山出と明をいひて

男イ松の木イやうイトのイ辺イ 初イ葦イのイ葎イ <sup>イ</sup> <sup>イ</sup> <sup>イ</sup>  
さかぬすきぢみして <sup>イ</sup> <sup>イ</sup> <sup>イ</sup>  
自然として其イ気が <sup>イ</sup> <sup>イ</sup> <sup>イ</sup>  
より其辺に初イけりせむ <sup>イ</sup> <sup>イ</sup> <sup>イ</sup>

● 洗物さびに原多法

のみ糖沢山の牛入へて洗くこと <sup>イ</sup> <sup>イ</sup> <sup>イ</sup>  
又入るる <sup>イ</sup> <sup>イ</sup> <sup>イ</sup>

● 塗き物仕とさみかまの法

ゆるゆるぬるぬる極上の山ぬり <sup>イ</sup> <sup>イ</sup> <sup>イ</sup>  
志のゆるゆるの年 <sup>イ</sup> <sup>イ</sup> <sup>イ</sup>  
ゆるゆるはやく <sup>イ</sup> <sup>イ</sup> <sup>イ</sup>  
伝秘多ま子黒朱 <sup>イ</sup> <sup>イ</sup> <sup>イ</sup>

● うさもゆる

又諸病にひきまぐりの服をきく <sup>イ</sup> <sup>イ</sup> <sup>イ</sup>  
ゆるゆる <sup>イ</sup> <sup>イ</sup> <sup>イ</sup>

羊のぞく溜を <sup>イ</sup> <sup>イ</sup> <sup>イ</sup>  
申腰の但途 <sup>イ</sup> <sup>イ</sup> <sup>イ</sup>

● 石名夫の事

石名夫の事 石名夫は... 金山不出る全氣

石名夫の事 石名夫は... 例の石名夫は...

湯の壺を... 湯の壺を... 湯の壺を...

石名夫の事 石名夫は... 石名夫の事...

石名夫の事 石名夫は... 石名夫の事...

石名夫の事 石名夫は... 石名夫の事...

● 水留りの由

水留りの由 水留りの由... 水留りの由...

水留りの由 水留りの由... 水留りの由...

水留りの由 水留りの由... 水留りの由...

● 角を黒物に仕立

角を黒物に仕立 角を黒物に仕立... 角を黒物に仕立...

角を黒物に仕立 角を黒物に仕立... 角を黒物に仕立...

角を黒物に仕立 角を黒物に仕立... 角を黒物に仕立...

角を黒物に仕立 角を黒物に仕立... 角を黒物に仕立...

角を黒物に仕立 角を黒物に仕立... 角を黒物に仕立...

角を黒物に仕立 角を黒物に仕立... 角を黒物に仕立...

角を黒物に仕立 角を黒物に仕立... 角を黒物に仕立...

角を黒物に仕立 角を黒物に仕立... 角を黒物に仕立...

角を黒物に仕立 角を黒物に仕立... 角を黒物に仕立...



● 蛸ひめく作ハ又法去つける地より古く年々下

竹廣記テハ地骨皮ジコウヒ 牙硝ケセウ 柝枝リウシ 水を用いて煮る

● 象牙ゾウガク 鹿角シカカク テ珊瑚珠サンゴジュ 仕法

鹿の角ヲ其窓の形を抄ウ上砂モト程粉ヲ入して是ヲ煮る  
主出シは望窓脂ヲ能く白く色よき時又くさうと以糸  
此砂コノをこ煮ぐし色見合イ出ス定ニ珊瑚珠コサンジュ也

● 石イシを和カむル法

胡葱コウシユヲ煮クぐらうし冷水レイスイ入テ燒クおの濁レて煮ル水  
減レらハ又熱水ネツスイを入テ煮ク三伏時サンフクジ石イシ和カむル法  
一度ヒト何ニもモ煮クる事也テ煮クる事也

● 磁石チシヤク類ル穴アナヲ穿ス又ハ公コウ位イセ切製キリ術ジュツ

磁石チシヤクの類ル穴アナ明ル甚月極暑シツゲツキ者の時トキ板イタの木キにて錐キリヲ抄ウ  
穴アナきりテ蛸ヒメクヲコ通スしテ炎ヒ日ニ干スべし能クカキキキ也  
穴アナ錐キリ少クて穴アナヲコくべし公易コウイく穴アナ穿スね申ス又ハ深コ小口コノ類  
も抄ウ是レ蛸ヒメクヲ干ス付ベし何ニも磁石チシヤク也モ切ル古コ又ハ疑ヒ  
也シ

● 硝子シヤウシ結キ

硝シヤウシヲ火ヒの上ノより干シ引張テ法ホウ持チテ或ハ割テ是ヲ粉コ過シ  
硝子シヤウシの如クをコねテ又ハ煮キ時トキハ上ニ割テ白砂シヤウ極キ也ハ硝シヤウシを  
火ヒちカり引ビし硝シヤウシハのノ目メをコ一ヒト反ヒ又ハ一ヒト小コ

荏桐油を升、是れは胡テ油、芥子の油よりし  
石灰成分能細末に能く和合せぬ也

● 綱引ちぢん

松脂を升、胡テ油に合、木ハハ合をてま 沃松を升、胡テ油を合

■ 万徳物の茶

温飩粉を升、さきと煮之、石灰を合、細末にして入  
搗合を至、焼物、一切はぐへし、石の末を合、  
又法、白子の白味、  
石灰を交、練べし、石を合、是れ煉、交せ引べし  
古ク見事、成、古ク見事ニ成、  
古ク見事ニ成、 亦利

● 蛙の鳴止法

菊沃山、極、中、花の傍、菊沃山極、中、  
菊沃山極、中、 菊有、菊有、  
菊有、 其葉、其葉、  
其葉、 黒焼、黒焼、  
黒焼、 其地、其地、  
其地、 水牛、水牛、  
水牛、 入、入、  
入、 盆、盆、  
盆、

● 毛生茶

花の葉子、花の葉子、  
花の葉子、 蛭の腸を、蛭の腸を、  
蛭の腸を、 煮、煮、  
煮、 其根、其根、  
其根、 水牛、水牛、  
水牛、 入、入、  
入、 盆、盆、  
盆、

● 木ヲ曲ル法

木小、木小、  
木小、 俵、俵、  
俵、 へ、へ、  
へ、 油、油、  
油、 付、付、  
付、 り、り、  
り、 湯、湯、  
湯、 へ、へ、  
へ、 曲、曲、  
曲、 ル、ル、  
ル、 也

● 木ニ墨能染ル方

芥子汁、芥子汁、  
芥子汁、 少、少、  
少、 墨、墨、  
墨、 を、を、  
を、 木、木、  
木、 文、文、  
文、 字、字、  
字、 書、書、  
書、 べ、べ、  
べ、 し、し、  
し、 寸、寸、  
寸、 程、程、  
程、 通、通、  
通、 ル

● 革の款水入

水、水、  
水、 升、升、  
升、 材、材、  
材、 の、の、  
の、 葉、葉、  
葉、 百、百、  
百、 枚、枚、  
枚、 入、入、  
入、 文、文、  
文、 字、字、  
字、 書、書、  
書、 べ、べ、  
べ、 し、し、  
し、 草、草、  
草、 の、の、  
の、 裏、裏、  
裏、 より

三遍 湯を少く飲べし 水で清くても亦よく飲

● 夜道 雅のがらゝ眼脈

先眼を塞ぎ目頭を指を押し見せしめ 湯を皆  
眼中に金満見せしめ 也 石ころの粒にて 湯を少く飲べし 湯を少く

● 五辛を食ひ 息止む

艾を灸 蛇を捉 丸ノ火を月 擦消し 是ヲ飲べし 又生芥  
一本食し 熟羊湯ヲ吞べし

● 紙 永代不離法

曼朱沙花 俗ニブト花ト云 根ヲ搗はれし 是ヲ紙ニ貼也

● 新 隅金のひあけ 後方

其 鑄口ロト火灸す 是ヲ飲べし 疾者不出也

● 膠 ツキノ方

菘ナセト 根ヲ星焼く 膠をぬく

● 鉄 清ス方

杉の木炭 又 桃の核ヲ粉にして 文入

● 病人 生死ヲ知ル法

病人の年 於月 朔日 此ニツク合セ 三増倍ヲ掛ケ 拂  
余リヲ半吉又 調形ルを必死ス 又半吉ハ吉也

● 木ヲ 銘ス法

刺し 木を銘スハ 荒の糞を 沢山あり 灰の上ニ 府其上ニ  
菅ヲ覆一夜 重バシ 是ヲ金水ヲ入湯沸

熱火...湯の中へ木ヲ入暫煮テ竹木ヲ多裁チ抄添  
結べし自由也

● 焼刃のよふ付方

荒糞を水で解き...  
半日迄...

● 盜賊ヲ逐ク法

其年の年徳神に倣ふ。昆布ヲ黒焼し酒の中へ  
入シ酒ヲ疑浦人々に飲セ見ル。盜ハ忽チ頬腫又妙

● 寒々自足凍(ぎ)る方

櫛の実ヲ生酒に浸至陰干して細末し手足に塗る

● 飛行散

荊芥タイカク 防風 草馬頭 細辛 芸朮木 六五味細末

草を獲又ハ...の内に...油にて解ぬ...

● 小便...方

青松葉ヲ能クのみて豚の内へ入るべし

● 蠟燭空の方

能く...の中へ水銀蠟を分白蛇五分

龍腦三分是ヲ水浪...煉合セ...入鹿の方へ...

不出...詰至リ...火ヲ燈スベシ...

● 瓦片

夜式の巾...苦參多を薄べし又方牽牛花実ヲ...  
兩袖へ入るべし又方百部 秦艽ニ色粉...

◆ ● 石、穴ヲ明法

山查子ノ粉一は多ク石、穴ヲ治ル所ニ至冬火を以て  
蝸蜒ヲ竹の先ヲ錐の如く刺リ穴先へ蝸ヲ指テ日ニ干付テ  
是ニくもむる利

◆ ● 幾夜も石眠法

鶏の尾を黒焼にし水で解勝入上ヲ糊ぐ紙ヲ張置へし

◆ ● 周夜眼見ル法

集根ヲ黒焼にし粉にしウキクサ芹の汁で解目付べし石をえ

● 銀宿錯ズ

宿下ニ鶏卵の白ニ引其上ニ根宿ヲ至又上ノ白ヲ引吉

● 雷ニ中リニサ蘇生ス方

降ク香チしきして全身ヲ薫べしク麩クり又治ルも  
竹系チ香チ懐中スべし

● 鯨髪ヲ付釋

竹の筒の中へ鯨のうぐの刺屑クダヲ堅ク搗入木ニテ堅クロチシ  
筒とも金久薄由で石出シ中の鯨とゆりし解ケ  
し時本石の灰ヲ交スいハくテ交川スべし

● 離ル法

サハカニ入ユテレハ離ル也

● 膠カニテ離ス法

茄子ヲ摺レはぬし付をべしまづくましこのちをも  
そのちをも

● きのこ 當り一時

山茄子ヲ葉トシ 飲テ

又が... 又少...

● 鯨 當り一時

せうのよまきゆき天をこし

● 人喰犬

我れ虎いふは... 犬は魚獅子... 右の天指より戌亥子世寅と折活ク極也

● 手肩生死ヲ知ル方

白馬の糞 蓮肉 六味亦分香色... 白馬の糞 蓮肉 六味亦分香色... 白馬の糞 蓮肉 六味亦分香色...

吐逆... 好ま

● 酒かき

ハ藤の葉をソウキニ三粒入置べし

● 木のふくれを洗法

皂莢のせんだけを洗べし

● 神仙不酔の秘

白葛花 小豆花... 白葛花 小豆花... 白葛花 小豆花... 白葛花 小豆花...

● 火ヲ久ク貯法

胡桃を火入半分燃テ火... 置べし 四五日きく

● めがし

五月五日早朝わかみ 苦十を摘汁つみチのみ出ししキキル知付ル

● 疱疹溜り茶

夕ゆふこり穴あな何程いかに深こくとも鶏子の白しろチち魚目いそめ入いべし

● 魚目

餅米もちこめチち唾つばミミて甘あまべし

呪

● 夜歩よるあゆ行ゆの時とき呪まじ

虎とらノ手て或あるハは六むノ中ちゆう指さテテもの内うち我われ是こゝ鬼おにノのニに字じヲヲ書かククテ  
此こゝ手てヲヲ固かたクク握にぎリリテテ行ゆベベしし自まづ然づ恐おそクク事ことおおしし

● 飢うチち志しのの傳でん

黄石公張良傳くわうせきこうていりやうりやうでん曰い

仙粉せんぷニに入いルルヲヲ

辛から酒さけニに浸ひシシテテ又また浸ひテテ手て酒さけニに入いルルヲヲ

壽延 人參じんじんオオミミノノ粉こなヲヲ混ま合あルルニに米こめ粉こなヲヲ合あフフニに衣きぬトトシシ

能よ干か望ぼうノノ用もちエエキキツツ服はくシシテテ二ふた三さん日にち飢うスス氣き力りき常じょうククリリモモ

勇ゆう力りき大だい増ま然ぜん氏し毎まい日にち丸まるヲヲ服はくシシテテ可よ也し仙せん蒼そう麥ま粉こな壽

精せい米まい是こゝ秘ひ事じ也なり

● 鶏けい唱なう古こ凶きゆう法ぽう

黄昏くわんぐん唱なう大だい吉きち事じ 初はつ夜やハハ惡あく事じ 夜や四しツつ時ときハハ妨たがケケニニ

雌め時ときヲヲ忌いムムハハ其その家いへ亡な婦ふ人にん家いへ礼れいををシシ

● 結布むすぶ引ひくく書か法ぽう

高たかククのの志しヲヲ申まをシシテテ又またハハ糲せ米まいのの粉こなヲヲ入いテテ墨すみヲヲススリリ書かククベベシシ

● 生蠟せいろうヲヲキきルル

生せい蠟ろう解とクク時とき燒やケケテテ入いルルニに急いそクク石いし固かたククシシテテ繪えヲヲキきルル

能出來ス 近藤三右馬の物語

● 休息丸 阿蘭陀在信

阿斤 <sup>アヘン</sup> 蟾酥 <sup>セシリ</sup> 右と左の紫 <sup>ミチヨク</sup> 稍率五分 射香 <sup>ヤシロ</sup> 一ト

龍腦 <sup>リウノウ</sup> 一ト 酒にて解丸 其上半ハ五分也 衣を掛ル 扱又用ル時 此とて とき 龜の尾 <sup>カメノビ</sup> 用ル也

● 諸濕拂

ヘキニヤコウ吉 又方 瓜 <sup>ウリ</sup> の汁 <sup>シユ</sup> を入 <sup>イ</sup> り酒 <sup>サケ</sup> に溶 <sup>ト</sup> かし 用 <sup>ヨウ</sup> ル也

● 痰咳の妙茶

耳牒一味ヲ細末し 飯糊 <sup>イ</sup> ヲ丸 <sup>ニ</sup> 中 <sup>ニ</sup> 含 <sup>メ</sup> り 湯 <sup>ニ</sup> 煮 <sup>キ</sup> 止 <sup>メ</sup> 妙 <sup>ニ</sup> 又 湯 <sup>ニ</sup> 煮 <sup>キ</sup> 凡 <sup>ソ</sup> 十 <sup>ニ</sup> 但 <sup>シ</sup> 実 <sup>ニ</sup> 手 <sup>ニ</sup> 玄 <sup>ニ</sup> 白 <sup>ニ</sup> 砂糖 <sup>ニ</sup> 一 <sup>ニ</sup> 斤 <sup>ニ</sup> 酒 <sup>ニ</sup> を <sup>升</sup> 六 <sup>ニ</sup> 細 <sup>ニ</sup> 末 <sup>ニ</sup> 其 <sup>ニ</sup> 上 <sup>ニ</sup> 酒 <sup>ニ</sup> を <sup>テ</sup> 解 <sup>キ</sup> 炭 <sup>ニ</sup> 火 <sup>ニ</sup> 煮 <sup>キ</sup> 煉 <sup>キ</sup> 茶 <sup>ニ</sup> 油 <sup>ニ</sup> を <sup>加</sup> り 湯 <sup>ニ</sup> 煮 <sup>キ</sup> 用 <sup>ル</sup> 也

● 聰明散

熟骨 遠志 石菖蒲 龜甲 各等分

● 八仙散

天門冬 生地黄 肉桂 茯苓 各二兩 石菖蒲

五味子 遠志 耳草 <sup>ミミコ</sup> の水 <sup>ニ</sup> 炙 <sup>キ</sup> 三 <sup>ニ</sup> 兩

● 草芥妙茶

馬頭 苜蓿 各等分 細末し 水 <sup>ニ</sup> 煮 <sup>キ</sup> 用 <sup>ル</sup>

少く 煉 <sup>キ</sup> 九 <sup>ニ</sup> 分 <sup>ニ</sup> 四 <sup>ニ</sup> 方 <sup>ニ</sup> 程 <sup>ニ</sup> の <sup>ニ</sup> 紙 <sup>ニ</sup> を <sup>包</sup> り 足 <sup>ノ</sup> の <sup>土</sup> ぬ <sup>れ</sup> 紙 <sup>ニ</sup> を <sup>張</sup> り 用 <sup>ル</sup>



● 角ヲ解ス法

角ヲ切蓋有く蓋入右の中に水を入し至るめくトテ入蓋をといいし解ル甚妙好キ

● 青角の法 今村氏口傳

角ヲ彫上ケテ綠青をぬむトト冬ニバニ日生ニヤウバニカト水右銅鍋ニ煮尤水酢も遠々何步酢少入ル

● 千ヤニ油并ニヤウハイト同

工の油を并ニツク草或拾目古錢六文

右三京入し何も葉カリル尤炭火ニて茶米みツテ入油付水中ハいい入テ見其いい物九成時分茶米みツテ乃而き折れも相當りしと知る也

● 石ハ文字を書き居又法

きせのやにテ墨摺交セ是のて文字ヲ書せねが一日救六十日入至テ後取出し見る文字石漆込洗テも彫りても変り不し居物好也

● 蛇貝の内ト銘を又ハ文書ヲ認ノ蛇の穴ヲ能ッノ字記

酢ヲ沢山入をケ月斗るこ破テ捨貝書くセシノいいテおし見る也

● 人形の餘の眼ヲリ光リ出法

胡粉ト蠶繭是ハ手敷又ハ紙類是ヲ摺交セ彩色スル也

● 鼠通穴ヲ止ル法

サ弱玉ヲ入置テ吉又蓮の莖ヲ入ルモ吉又其外カミトテ黄雄又其州ヲぬくも大いし

料リ ● 道中味噌の仕方

極上々味噌ヲ能摺板ニ塗付日ニ干テ粉トシテ持參シ  
食ル時水入汁ト好モ縁中の調法有キ

呪 ● ぶね極ル法

上十五日ニ植ルハ実多シ又下十五日ハ実少シ凡菓始テ熟シキ時  
両手ニテ握ベシ年々実ヲ倍増又社日菓木の下ニ春ハ実  
之落ヌ物有利

瀧 ● 水溺レ死スルヲ救方

足の大指のヒカキスル人ハ生ル然レモ明林卷ヲ鼻より吹入  
ぶシ暫有テ水ヲ吐也 (こころん)の葉を乾かし粉にし又ソリ方付ハセル  
久りてハ不付ハ生キ又ソリ方付ハセル

● 石摺の法

白芨 酸漿汁 細粉 白礬 各等分 右ノ白芨及白礬粉トシ

能少シニ色目モト 細粉ニ下入能スリ 確お草汁トシ

粉茶解テ文字書軌 墨玉ぬり軌茶粉拂  
ツヤ出唐蠟トシ摺ル

● 酒カビ味酢ク成時並ス法

蛇貝ノ白焼を粉トシ酒の中ニ入ル 忽並ス也

又方藤の花陰干トシ入ル 又カビハ鼠の糞を能洗火にて

焼灰トシ入ル 又酒を酢トシ 又子ツ石膏半兩細末ト

縮砂同杏仁セツ右四色酒入壺或ハ摺入口ヲ封シテ三日置ベシ

呪 ● 蠅ヲ去法

又方浅草山むらやぐ 今をんおんのふんあま  
如心用ト出たがいサキ 摺下入右トシ 出サカ  
十二月の雪水ヲ貯置其日果子飲食類トシ けハ去ル  
又方五月五日の午時紙小白の字ヲ書掛の四方小張ニ書ベシ

呪 ● 鼠穴ヲ塞ぎ方

正月初の辰ノ日并毎月庚寅日壬辰ノ日上段の満ルノ日  
胤完ヲ始メテベシ又三月庚午ノ日胤ヲ尾ヲ斬テ其血ヲ  
家の梁ニ塗エベシ

呪  
瀧 ● 小兒夜啼止ル法

天皇皇 地皇皇ト六字ヲ竈の床ニ書置ル止ル

呪 ● 疫病家ニ行時法

右の手ニ中指ニテ坎ノ字ヲ書其手ヲ坐ク握リテ行也

呪 ● 川渡ル時

土ノ字書ベシ又朱ニテ書ルノ字ヲ身ニ佩シバ難ル

呪 ● 蚊去法

天地太清日月太明陰陽太和急々如律令勅

暗キ所ニ向ヒテ此文ヲ七遍念ヒテ燈心の上ヲ吹テ此燈を  
少ク火ヲ點ズベシ

● 三箇西忌日

大禰 摩訶盧神 貪欲神

狼藉 波羅毘神 眞志神

減門 伽羅陀神 愚癡神

● 人 平安教書示  
馬

口ク各出ル介 若特屬るをいふがきやトナ  
そとをまを志下 是ハ月風ニ介を氣をう  
そとをふふとてしなふ月とてし

● <sup>カガミ</sup> 外科の疾者傳秘の事

中ハ其疾も宛決まず求フ所難治も然れ  
るめて川に下りて走りぞろいむ爾國の  
てちんも用時ハ一痛かこ又  
候云鼻首あり切に能ある福ハ鼻の穴ハ  
入らぬあかり伝へきんをすか能ハも  
赤く汗くぬりハ又死ぬるハ其の汁を  
極多り是極秘也

● 子ぞく山と伝

松平大和と度取を武員川城に松出と  
中折 <sup>ヤキウ</sup> 築弓船行大和邦と自分と  
代系も忘る類くけは後も早速出

尤是ハ石大和と度取も本里は内  
津谷林八と中と名はれは也  
預げけしは是又むいんごも  
かけひ事や急を夜中りに

● <sup>ウツミ</sup> 姓名大割合方の事

是ハ水河山又形も此す  
水すねどもあせを水上げ水すねども  
ハ心たごみは極細糸也是ハ石州信田  
山をある御上向の上ある目も  
いふも百文位はまははは  
まはははははははははははは  
中一あるあり

● 脹妊まろり法

(又法曲例甲斐及るる家伝て脹妊有るの法を伝へるは信る可なり)

是ハ七五二の法にて是る事の本質として七六天の七曜星を評し五五五行五常也三三と天の三星とに一の七五二の教ヲ合せられを合ふ十とトぬる。其すまらぬ百より十と百と定メ則ち其すま日ケる。物事一満。たとバ婦人月ケる淨られば十日ケる多り廿内婦の状より四五日又ハ六七日流血する有り廿十日ケるの淨らば十日廿百十日廿百と二日の間ハ情分満て其時情妊まろりハ其子証をとして後疱瘡瘰癧し神毒を介腫おの憂いぬし又此月氷の内ハ情妊まろりハ疾瘧とぬる。又此出血止むるは十日不淨の自教の月ハ妊まろり子ハ危角田虫其介ハ腫おせし一生サマハま

ノ氣力あり陰事脹べし又一月二十日の内上ニ十日の月ハ右の如し十日より未の十のケるハ女の精分おとろり不全候て是ハ乃る業一ぬし尤此二十日ハ其婦人月の内歳日ハ淨らぬりた其る候とぬる日ヲ初日と名けてまより利先ハ此二日と暮す也是ハ極秘業也

但此もれと物も日業して上ニ十日ケる子其ハ実証山とせし十のケる。其るは実がし 又情妊せぬハ玉の内子業。其ハ方とあり其して子を産曲リテカを又ハらつむり又ハらたむり物にたれり此はまか中あびてはぐりてを形す也途をまろりねん如しはぬがろりぬおあり又情妊まろり法ハ子室その根ヲ兼其を



以と五定を切換まふ丸の行濁入上病で  
以と考大し以と胃にりぐし結をあられせし  
まふ考大し以と胃にりぐし結をあられせし  
大白砂糖を加まら結を摺て糖菓の如く  
以と考大し以と胃にりぐし結をあられせし

● 苦疝の妙薬

天化十一年の二月十八日

古用中極大日者の日とどいふ  
初ら糖を糖まき天火にて干付ル是六せき  
以と考大し以と胃にりぐし結をあられせし  
出ぬ  
神千ルに付も干付し中死りたるまよりり  
飯の上の付も干付し中死りたるまよりり

の二層有ハ鬼一まどいふ  
水に以と考大し以と胃にりぐし結をあられせし  
古案又入目ゆり汁のなる十文之を糖  
以と考大し以と胃にりぐし結をあられせし  
みりくまき以と考大し以と胃にりぐし結をあられせし  
法物ハ以と考大し以と胃にりぐし結をあられせし  
病ハ以と考大し以と胃にりぐし結をあられせし  
全收おま還る

● 法戸おき法子て振る法

水けハ極日候

夫より糖を糖まき天火にて干付ル是六せき  
仕上ハ八厘のまき白ク塗上ケ糖干上ケてま  
以と考大し以と胃にりぐし結をあられせし

● 七後むんて雷除のキキ

十支路盤の松屋

一ト松キキ

七二九六

一ト松キキ

四三或又

一ト松キキ

一六六二

一ト松又キ

一四六

通法...を長る...雷除のキキ

五津の香除ケ

又方由歌

林...の...油も...  
ハゲ...の...油も...

口...一松又キ

六四一

口...六四二

一六五

口...二六九二

二六九二

十...也...白...  
是ハ文化...  
多ク石...

是ハ文化...  
多ク石...





● 百抽湯（百抽申湯）の法

文化十三年三月甲子日  
三毒丸を以て掃きたるを  
傳授せしむ

抽の數百大小の筒にし丸の徑（す）とす  
カニヤウ目（ま）を指母一枚の皮剥（は）て指母  
大ニ符麻（あ）り木綿（こ）袋（に）入風呂の中（に）  
初（は）より入掃（き）火（を）てせ（し）一（し）筆（を）

但おまの目より入りて入り入湯スべし  
又おまをぬけハ世中の毒を伐たす  
其蓋の上（に）を又ハコ（に）ハ能（に）入（る）也

切能  
婦人月々厄を巡り

■ 解毒丸（げどくがん）

大毒虫を以てするを  
大合（ご）し（る）とす

此薬原（は）らむ石（を）志（を）切（り）た糸（を）及（び）宿（を）下（を）も  
市（に）公（に）加（へ）せし（る）也（に）施（を）茶（を）と（し）り（し）る  
主（に）園（を）より（に）取（り）て（は）り（し）る（に）は（り）た（ら）ん（と）す  
（は）者（も）も（も）お（も）れ（し）り（し）る（に）也

但（は）合（を）食（を）何（を）より又毒虫のこ（を）し（る）ハ  
一（し）粒（を）も（も）分（を）割（り）り（し）る（に）は（り）た（ら）ん（と）す  
と（し）ま（し）毒虫のこ（を）し（る）ハ（り）た（ら）ん（と）す  
之（を）所（に）て（は）全（を）収（め）と（し）る（に）は（り）た（ら）ん（と）す

● 石さうふ木にて梅の枝

春日形 雪入形ぬきし思ふまじく木をさす梅  
仕上りりりし木の木も もろく 枝の枝の一面に枝あり  
ぬりし竹は是にほりかむぢりみみげ又は合を  
至是はチウリウケク多くと能おし身は  
日干上チべーし田まきしとて底なるゆきありお  
雪おぬりりしとて底なるるなりし

● 根たむ合せり伏

是も竹をさすし木はけり候由用らぬため  
有る時字面あるに掛掛りの刑師行面を  
其木根を助の席の角に在る席もも人  
はかたは合せり伏

是は竹の事も竹の利の刑師の母返りし  
合せりし掛候は日利也又と上仕上チかん  
研 長 先キチソきクすし合せりる母は  
そのと急はでり利しむはてし

十のしは文化し子年二月七日お 沖城竹を  
在る思く守りぬ木も通チ竹の記を  
在りし合せりし首チ竹の竹の皮切り  
残るは竹切の竹切の候も其の者も中  
定り事形れし竹切の根たむ合セルは

● せんぶんうあまの人 お茶業 秘のせあを

せんぶんうあまの人 お茶業 秘のせあを  
思ふは川のみ竹の味も竹の白粉

半斤入又純摺交てほりませ古酒を升る者多法  
花の條紫より赤くして堅みしして○煎り丸  
之常くお茶ふり用とる但口辛差  
白ひ葱浦りり其時味あつて味を右葱を  
香をし大ら〜年〜好り利

● **せのめん**より〜 多きをきよ といひ〜  
まきよすの煎りた〜お茶と用とる

大梨少子は太くして二三粒おろし〜  
志ろ〜十の飯右白り〜太白粉煎り片  
夏〜丸を金練を〜 右白練茶〜 右あり  
し〜かの志ろ〜り〜け〜まの世夜〜子隔〜入〜  
火〜かけせん〜法〜 但〜ある上座此の人〜ハた〜通  
能仁まお目 車るおト〜おげ人〜入〜下細末〜

も入る〜 志ろ〜かのけり〜る此の時ハ上柄がこ  
入せん〜法〜を

● **のんどけ**はひの茶  
又方あんてんの実ナ丸  
香の好いもま〜け〜ハた〜  
痛〜ま〜実〜か〜みて〜天〜お〜

● **さんご**に〜 角を折る法

角を好の形に折る法  
少る也又まく〜る六物研に後板録  
を入て考〜る〜

科 **昆布**の法  
らんぶ〜法中〜法〜知〜べ〜わ〜ら〜成〜

● 法の角を極のことく又條のことく  
筈あふ作るは

つもの  
庶角粉を能き青竹の設えんことし  
右竹の外皮をさつりて石を成の如くにし  
小穴を明け是を右角粉に入望くせん仕  
年月厨の壺に漬置或は日祓もして出せし  
見れば角粉わらうに極のことくぬる是を  
細くすべし又望んと思ひ大根の志かり  
汁をすくぬるを又本州のせみ下りるを  
水にすゆし金杖能くすべし  
能く望くぬるあかり

但是ハ古伝少く急心あり

角粉ヲ湯入テ水ハ入合入猫軟を抄キ  
入箱に老たる法がな別世世音云々

● 玉敷みぐくは光り出る也

玉敷 さんごぶ 其布を磨るる斗でハ  
光りすくし光りヲ出さハ磨ク日茶を焼ゆ  
玉敷 さんごぶ 磨ケバ光り出る也

● 象牙又ハ庶の角を珊瑚珠にす

ぞろげ又角物として其の形を極能く  
まねふ入是をせみ下りて出せし  
骨て又よき能く又さつりて

女をアス人づー

●上田面をを付 少んぞふ香 文化土ま年 骨十月日

少んぞふ一併 結知本チチカ 素根の耳長 但素根

大谷をよてせん 結実者のごとく

一 皇屋後物 結川へ 結をりてに

板子 結り 少んぞふ 素根のせん 中一交

にて 結り 少んぞふ 素根のせん 中一交

於 素根のせん 中一交

せんぞんをを 其外のん

●あぶ 結 田 結 結 結

結 結 結 結

● 結 結 結

一 車井戸の 結 結

● 結 結 結

一 竹 結 結 結

● 結 結 結

一 竹 結 結 結

● 結 結 結

一 竹 結 結 結

● 結 結 結

一 竹 結 結 結

五三三三三

行成 ● 江戸流儀 漢土風味の仕法 又言風味互にハハ

一例 年平定式 漢方一掃 牙身 漢流を 物と六舟入

中比出ヒロクとも 糖六舟入 年平 漢方 漢方入

右も 通何し 押ハ障か 漢方 漢方入

是ハ文化上 子年 六月中旬 旬 漢方 漢方入

方 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方

● 角形 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方

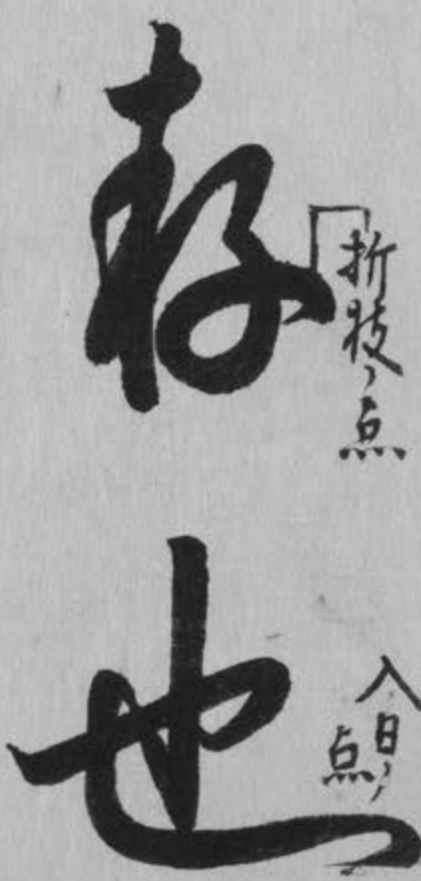
一 席の角 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方

輕 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方

古 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方

但 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方

● 心トヤ字 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方



● 入生 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方

右 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方

一 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方

ハ 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方

ハ 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方 漢方

● 中暑者を治す孔迷法の仕法

文化十三年七月二日  
西丸山貞舟中川惣左衛門

又中暑者を吐き有るべきか要す良薬を迷すもぬが  
折たるも熱さ傷むるを以て心下膈底を  
三三を食むるは迷子收め也又霍乱ハも我ニ取  
日名ニシテ一割の熱さ傷むるを以て心下膈底を  
又腹痛水瀉も為りたすまきあがり其亦治法  
用ひて去 但実油果物等即時心下を以て少きに  
合物停洋むるに用ひて吐き有る其亦治法用ひ  
れども吐瀉有るより其亦一劑病を外移すの  
病子家むぬるを其場より玉月に暑者輕停洋  
亦合物を治すに迷に治すも其亦一劑の良法あり  
此ら暑者の以て治すに迷に治すも其亦一劑の良法あり

● 頭痛の場所

毎年六月 夜三八日 尚日九日 山川宿の  
天皇のあはれ病者有るのぞみし  
七月九日夜七  
右月所より

浅井肥後守の御所  
上里守の御所  
宿を治す

頭よりハ毎年四月月中旬旬迄まで  
骨髄 湯治場のつえ

津井春葉伝  
文化十二年四月

● 相換七湯の幸一何七思美百も希

湯元  
旅うせき  
系不系  
是ふそふの派は道

湯場 宿  
福住九  
少川百七

湯初リ  
東の派  
そふの派  
是ふそふの派は道

湯宿  
秋山油  
一の湯  
田村久

坂の下  
堂上  
そふの派  
是ふそふの派は道

大和屋  
是ふそふの派は道

二  
坂の上  
二ふの下  
是ふそふの派は道

高良屋  
友屋

ところ  
是ふそふの派は道

菅屋  
石屋

本  
是ふそふの派は道

柳屋  
石屋

湯元  
所  
草の湯  
是ふそふの派は道

松屋  
伊屋



咒

●アテ病よりけ兒

又方社田三川所製道田朝下  
長保寺石上計業店にて  
代元也くくあげつふ人々入

相茶よ物干をかぎし  
三日のふたよりと入玉目川に流せ

多き兒の風のたよりん  
まじりぬれぬあみくし

●アテ病よりけ兒

十通下の白をまのまに流し

咒

●もろしめ兒門に張る

比川家た馬つ度社にて  
と流すしどくは流るる

咒

●犬除の唱法

三遍中書  
西川の園に流すを春見を

●おきいぬを何れをく

あむらうんげん  
あむらうんげん

●目者中りの茶  
又方干練をぐんとせん

志のつけをせん  
まじりぬれぬあみくし

●皮膚痛の茶  
又方七月十八日柳の葉十八粒水岩の通入

多量の中らぬ  
程結らぬ

● 寛中丸

(文化十三年七月九日)  
中村左月母の法

臨川新薬にがき川用  
よきまじりし 香附子 びざり川 子あて  
中三子 今名傷 腹のこも ちり腹  
少腹もあまらう

呪 ● 川けの兒也

中江平目餌魚の毒とてたぐり川に出  
びくりに老早業一但水引二把ま候も救下  
陰が入用より方と段お早業

● 尺八の笛す人のとえん

尺八の通り 振てやり早業一 長力ま尺八守八分



● のまきハハと敷目...  
● ままきハハ丸の法

山形川源は... 松尾老も信... 由田口の子...

屋敷りぬ... 黒物と... 知未

是下丁子... 細末... 加人川... 知未

種理 ● 程... 入... 魚の毒解... 也

よきの... 小... 川... 流... 目... 其...  
腹... 上... して... ぼ... 上... 方... 付... び... ち... ん... ち... ち... ち... ち... ち...  
道... 年... 八... 山... 根... と... ち... ち... ち... ち... ち... ち... ち... ち... ち... ち...

水州加

用ひる一ふくナミツにけ湯  
みクはやくそしニ度小用也  
或度今も湯ま今みクはやく  
用も付むむぐ一香とおくび出  
男中も人ミ一うて痛も出るは  
方血の道のみ業也

田記  
田記

天正王

日谷大

天正王

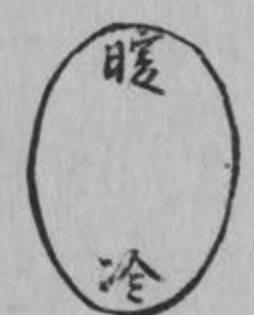
● ちのみちの業血調教  
一服代古持申一  
一白りか九貼也  
是又濁子室サるる  
吞し

● 銀形人車升ヲ割テ

割と七合みク程  
白紙ハ四合程ぬ也

● 料 ● 女子見んよりよのま

長キハ男  
短クハ女



木女子此のちナ  
暖物も生きぬを  
尾のち冷ぬハ生む

又以尾のちも  
尤鶴印けらけ  
世にこし捨ける  
物多ク四百ハ  
死ぬ

● 野原五外多ク  
向水もむ

是ハハ腹より多ん完の辺ヲ押ラるるべし  
や内なるも木田よりくさく物多かり

● 犬猫外なるほちん法なる付仕  
是ハ早速水を乾き吞せ又後ハ七歳迄も  
くける性気あるもの也

● 熊の膽心付石より少の信

名をこま水入るべし種多あるを不詳  
白種水中に残る是ハ梅もの也

● 死犬ヲ菽ト埋又ハ

木尖の仁をぬれし付此の目の中より行のこもる

又法

一 梅さび 耳州 赤菊かきしん 牡丹を吞

又法

一 其の物よりはあき方し信よわごりき之理を  
人法をば粉ヲ襪大湯にわごりて吞べし

一 正月十六日 七月十五日 六月十六日 毎日申の  
九時の時

又法

一 梅葉の干粉をサミ吞てを但吞る後足  
筋高く坐りりく病等の根切也  
尚分七百種ハ青物にるもサミ

● 痲病の根切法

(信) 良なきもん 藤巻ク  
傳し

業の根の皮 子 了 し 業 青木の実 三枚 か

右 能 産 ム 一 吞 一 一 一 一 一 一

況 ● 運使公能ぬ兒

毎年浅草市 廿七廿八日 廿七廿八日 夕刻 夕刻 入テ有リ  
是キ丸のたのし入 是キ丸のたのし 入テ有リ 入テ有リ  
此四月ニテ日福茶ト一所入セテ 此四月ニテ日福茶ト一所入セテ 宿因  
此丸ハ仕立ありキ

兄 ● 又法

毎月十七日 毎月十七日 こん 入テ 考テ あ り ゆ か り

兄 ● 又方

甲子の夜九時 甲子の夜九時 子 初 九 ト 袋 ナ ぬ の 物 之 後 ヲ  
お仕立直ニぬの上 お仕立直ニぬの上 テ 木 申 ノ 文 書 キ 一 一 一 一 一 一

兄 ● 又方

庚申の夜 庚申の夜 毎 七 子 ノ 文 書 キ 一 一 一 一 一 一

料 ● 鯨の料はたまひす

一 大ッ云の目切山標せり申りつるを

一 ちんくけりんりもな

一 存るをいして死すけりもろせりな

● 蓮花あよりすのき

根かしてをたまきぐのどくぬはる年て百に捨ん

まよ二二事りあてはづし但二事一六二事一の庚子

料 ● ちんくけりんりもな

● ぬぐいまひよ

初をきつぬハ水てはかききづしとぬをれり

● 石ころふ求ナすのま

大和玉の山代なすれたままはあくろふうし差

衣代なをもつろふきぬハ山島定よりう又ハ味味

組の月をむね

● 石ころふ求ナすのま

人おも月夜中あど  
津とら佐助能上ハ  
世世初を標子物区をづし

柿葉子甲あそてかけてお拂ふ

● 疫病よりけ児少効

門入口は法むづし  
又路一敷い懐中

いそぐと津流川の流板

● 疫病よりけ児少効

組をアけて歩ぬ  
あつてもうらうあつ  
心やまを  
かをもちあ  
信をい  
思ひて  
あし

永

呪

途中とて祈し馬向ふ方より時又た坂にて  
車とての兼り付之向ひはゆるぎなくし

そのごとし祈るが浦の祈りよ

祈るれ由け 祈たしを思ふ

呪

● 盗賊不入の呪 門口に糸糸道を入りおはせし  
又の上後山に仁王と云う信事外要也  
しきまみけ人をおまじや破がらまじ  
思ひまけそ 仲傳まじらまみ

● 半銭毒キ上代求よ

大銭あるを見せ銭とて申すはまじらまみは  
まじら半銭の毒を銭にまじらまみまじらまみ

料● あまじいわらうまじらまみ

是ハせの幣を具とてまじらまみまじらまみ  
あるまじらまみまじらまみまじらまみ

料● まじいわらうまじらまみ

せのまじいまじらまみの上まじらまみまじらまみ  
中をまじらまみまじらまみまじらまみまじらまみ  
まじらまみまじらまみまじらまみまじらまみ

料● ある清あまじらまみ

後場と考まじらまみまじらまみまじらまみ  
まじらまみまじらまみまじらまみまじらまみ  
まじらまみまじらまみまじらまみまじらまみ

料● ちり貝生ふるぬく法

天井か塩ぬ他ちり貝の中うら 均等に  
さいし極々入るよとけ居のちひる 自然と貝の  
中の身ぬけおちくぬくテちりやうし  
ちりとりあるちりさん眼にたえん  
ゆりく 極々入るよとけ居のちひる



● ちり貝生ふるぬく法

ちり貝の生殻ごとをちりく ちり貝は  
塩べし ちり貝のちりく又かちり貝もちりく

● ちり貝生ふるぬく法

ちりの中ちりくせ八分もるるを ちり貝ちり貝  
ちり貝ちり貝のちり貝をちり貝 ちり貝  
ちり貝ちり貝のちり貝をちり貝 ちり貝  
ちり貝ちり貝のちり貝をちり貝 ちり貝  
ちり貝ちり貝のちり貝をちり貝 ちり貝

● ちり貝の生ふるぬく法

ちり貝ちり貝のちり貝をちり貝 ちり貝  
ちり貝ちり貝のちり貝をちり貝 ちり貝  
ちり貝ちり貝のちり貝をちり貝 ちり貝  
ちり貝ちり貝のちり貝をちり貝 ちり貝  
ちり貝ちり貝のちり貝をちり貝 ちり貝



●角粉細工能方極秘傳（他らめくじへテ角粉）

らめくじは山ろくろにて押つぶし水で洗ひて乾かす

極細糸状角粉ヲ細くす

但角粉はよく洗ひて  
乾かす人々極細糸にて  
洗ひ乾かす日紙壁ノ灰  
水に入れても少解ひきの  
油ト日干す

又上ヲ洗みかき上ヲ上にて  
扱やヲ出ると以水でぬぐ

料●らめくじの角粉は角粉の油のす

上器油下みかん柄き入らめくじの灰ヲ搗るヲ入て

ゆきまらえ油むき風味むきを秘す

料●まぶせ持仕方このまぶせ物枝持村路向き

法つきり先を灰の末から取り出すと一はまぶせ  
へまぶせを身につく、以てまぶせを干すと所をまぶせ

こ上は彼らゆ干の材まらぐべ又こ上はまぶせを  
くくぬきゆりも物ゆきまぶせはまぶせ百回洗ひて  
箱から出して干し灰が白く粉がまぶせを

呪

●靴は化ぬ格

又まぶせはまぶせでぬぐ  
まぶせのす

白くぬきゆの物を八月十五夜八分の一を  
干して靴押もてぬぐまぶせを

●痢病なぬ法

じんろくじどみりせやうがこぶき春水の因入まて  
は水さす物をまぶせも洗ひてはまぶせのこぼきに  
ナぬきゆりまぶせも痢病なぬ

但もまぶせを井戸の水の中に入れて洗ひて

● 痢病の業又腹業  
 白切餅ニツツ 白ハスの葉水入テもあつても 湯うた糊ぐて  
 水で先中一程入水入テ 湯うた糊ぐて  
 極細くう。煮た之は程さる。一を程く。

料

● 白里とらちりとみちりとみちりとみちり  
 右粉物一程うく水又能せしとらちり煮るる時  
 水子結白とらちり入べし 此粉ハ右とらちりのみ  
 不残ハ白とらちり入べし 其粉ハ右白のみ  
 まくしとらちりべし 不残ハ右白のみ

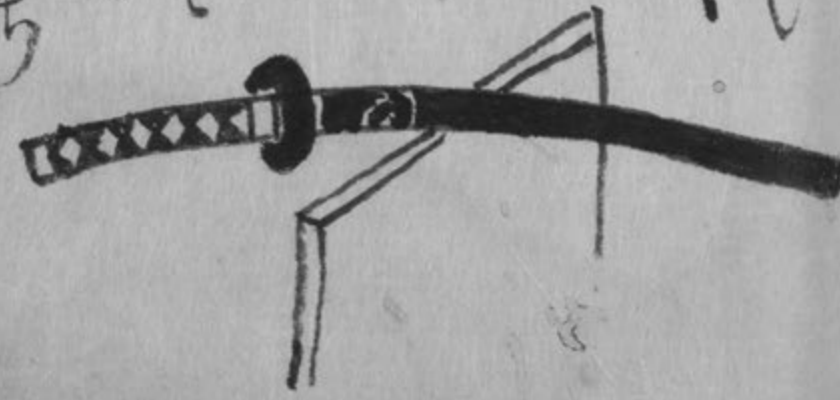
呪

● 口ホの乳上焼ト主物とらちり  
 湯通しとらちり知し 此乳ハ右白上

まぐ焼ハ右白上ト主物  
 但右乳上ト主物通板うらみ  
 左乳上ト主物通板うらみ  
 右乳上ト主物通板うらみ

● 痢きこふよのま

ぐいホの痢多病とらちりとみちり  
 しとぐいとらちりとみちり  
 きこふハ右白上ト主物  
 かぐとらちりとみちり



● 一 木はすしはは 北のよみ 社日ぐを

是ハ 北のよみ 社日ぐを 北のよみ 社日ぐを

今春目 今春目

附 但社日の枝ハ不明

● 濃樹法 志ぬをを 枝くさ

有社日 有社日

● ありたる材 志ぬを

● ありたる材 志ぬを

● ありたる材 志ぬを

● ありたる材 志ぬを

● 徒木の枝 徒木の枝

徒木の枝 徒木の枝

徒木の枝 徒木の枝

● 徒木の枝 徒木の枝

徒木の枝 徒木の枝

徒木の枝 徒木の枝

● 徒木の枝 徒木の枝

徒木の枝 徒木の枝

● 徒木の枝 徒木の枝

徒木の枝 徒木の枝

● 齒を痛ぬくぬくす

仙人草と小羊茅種魚と草は是に歯を  
ぶりの月極く歯と半改テ煮べし湯シ  
こて煮くす煮くす種くす種くす又人々を煮り  
の歯(ささみぬ)と煮くすべし痛ぬく  
あはぬぬけぬ也



料△●もせをむひぬく仕るは

もせの次を煮ぬぬく切捨まふ火いぢりこ  
しりけり種種ぬくこぢりけり種種ぬく  
煮ぬぬくもせを煮ぬぬく尾の子は煮ぬぬく  
べしまふぬのけりぬぬくぬぬく川にぬぬく

脊骨の骨を煮ぬぬく男の骨は骨煮ぬぬく是を  
又元の骨を煮ぬぬく山ぎりけり骨元の骨を煮ぬぬく  
かぢりけり種種ぬく何れぬぬく入テ煮ぬぬく  
骨を煮ぬぬく煮ぬぬく風味ぬぬく

● 又子もせをぬ本たりせの極く骨を煮ぬぬく

もせぬぬく種種ぬぬくまふ大おびの骨を煮ぬぬく  
丸干煮ぬぬく白油と煮ぬぬく骨を煮ぬぬく  
ぬぬく入テ煮ぬぬく骨を煮ぬぬく風味ぬぬく

料△● 又は上の骨の骨を煮ぬぬく

骨を煮ぬぬく骨を煮ぬぬく骨を煮ぬぬく  
骨を煮ぬぬく骨を煮ぬぬく骨を煮ぬぬく  
骨を煮ぬぬく骨を煮ぬぬく骨を煮ぬぬく  
骨を煮ぬぬく骨を煮ぬぬく骨を煮ぬぬく

● 酒の肴

少老志きいませし

あつたまをむらうらうらとく切是を産  
少くともみちりくちを捨てる。能志がりて  
日干上ケべし。白ク干しし。是は野鳥を  
三つから四つを俵のまきどりの  
本青よりし。又粒をこききりぬ。程が  
ぬくし。せりもし。ぬくし。せりぬくし。入る

料

● 黄葉漬の仕方 飯保ききりませし  
黄菊を能むし申。ばらりくとして其は  
能くひし能くもたふ。時垂入をいり  
玉テ且上(物干)せむいりし。並ぶ白こきり

ふり又黄葉をまき材作らちませし  
形ふ仕置らりし上下りみ入酒材あり  
りけりまの目法を。野鳥こりぬし  
替。まきり

組出のあき入。は料。ハハサ。まきり  
ぎつし。湯がぬ。能干上ケをいりし  
いりし。ぬきりし。ぬきりし。ぬきりし

● 火縄の火水作らるるも増法

本錦火縄(の)きんきんきんきんきん  
川テ干しし。こきりし。ぬきりし。ぬきりし  
仕置らりし。ぬきりし。ぬきりし。ぬきりし

● けいふせいご仕よう

ちよものこしき道におき存板下竹曲て  
た左の指は行くともちちめりてあづし  
るもて中の解すくえりおのれと  
春ころあると耐子く出てえづし  
但ハ羊より人かゆ入水由か入方と  
そらうくともしきまのせあまふ  
かたきあぬバヤ中らもはるのれ



こようみまのこ

● 天一天上の目有しとせん兼天社目よ

是ハまき中中のみだじしとこ日てたか目  
天社目ハまき中中こみだじしとこ

● あぶつめく佐

大根お湯のまをりけをきくまきん  
しりねぬけりぬああがぬけし

● まふおびはむのりく水は肺痛、せり痛  
あまきよよてむらあまの葉

めんろやド ちんひ粉て用

● けいふせいご仕よう

ふねし せんしき 其料尚完してせん

● きんごうしき痛に葉

のしめし せんきし 粉してせん

● せんごうしき痛に葉

● 五ヶ敷のり

山積まきせやうにほてよう

料

● 初づけ料に用細之を他の方

一上りのそめぬのりを濃に練りてあまよて  
能神り合を金へぐり粉をわけて入又能まをり  
はたせりわさしきまじりて取捨まの形に押法  
おぬくまふまじりて能神り切を返しはまをり  
まじりておぬくまじりてまじりておぬくまじり  
おぬくまじりてまじりておぬくまじりておぬく  
おぬくまじりてまじりておぬくまじりておぬく  
おぬくまじりてまじりておぬくまじりておぬく

● 志花今又梅よう

一 能故羽斤面よりぬきて能神り切を返しはまをり  
おぬくまじりてまじりておぬくまじりておぬく  
おぬくまじりてまじりておぬくまじりておぬく  
おぬくまじりてまじりておぬくまじりておぬく  
おぬくまじりてまじりておぬくまじりておぬく  
おぬくまじりてまじりておぬくまじりておぬく  
おぬくまじりてまじりておぬくまじりておぬく  
おぬくまじりてまじりておぬくまじりておぬく  
おぬくまじりてまじりておぬくまじりておぬく  
おぬくまじりてまじりておぬくまじりておぬく

● せんせいの名茶

文政三年四月廿九日  
行徳のふもろの藤巻久の伝

正月廿九日 二月廿九日 三月廿九日 四月廿九日  
五月廿九日 六月廿九日 七月廿九日 八月廿九日  
九月廿九日 十月廿九日 十一月廿九日 十二月廿九日  
正月廿九日 二月廿九日 三月廿九日 四月廿九日  
五月廿九日 六月廿九日 七月廿九日 八月廿九日  
九月廿九日 十月廿九日 十一月廿九日 十二月廿九日

● せんせいの毛茶

凡の葉をこまみみて汁をとりて煮く物

● 小豆茶 兼大人ありむん 兼疾有茶

白ハス花 兼于 兼公 兼南 兼北 兼中 兼東 兼西 兼南 兼北 兼中 兼東 兼西

若くは味能くもむる湯茶の代りたることあり

● 疾の妙茶  
落の根く又ハ  
春田少少まき  
文政三年の二月

志川でまき物なるが  
けいりくもむる湯茶の代りたることあり

白きがらぐらぐら  
けいりくもむる湯茶の代りたることあり

三月廿九日 四月廿九日 五月廿九日 六月廿九日  
七月廿九日 八月廿九日 九月廿九日 十月廿九日  
十一月廿九日 十二月廿九日

三月廿九日 四月廿九日 五月廿九日 六月廿九日  
七月廿九日 八月廿九日 九月廿九日 十月廿九日  
十一月廿九日 十二月廿九日



●乳籠知り各茶文政三辰子以大巾者八等  
 酒并但るもま相手ぬま田山もあま  
 付くあまあまこりるあぶし  
 但れ病りてああらるる  
 三毛物ら何れもあまあま乳あああ  
 正あああ

●茶場三石所

宗附る 禪宗 女福寺 廿年とて毎年  
 二月十五日八月十日正 後ト迄茶茶場  
 主入場し 所こ入人  
 ●此の奥あどどろろあまあまあま

料

何者 一一夜ち地ト逆金こまよ大た  
 かぶせあぶし ぞろろはきき白ひきえ  
 或れあろししてアのちち下あまあま

●使公種物之法

文政三庚辰年二月十日

但尚辰年正四百廿年目ら当り  
 廿年終る方申酒こる庚のよ

一 年徳部をあらま日也

価物左と申

令限 浅る月 何れもあまあまあま

Kitasato Memorial Medical Library

補志申しぬれば徳義入

一少互之め——一明の子は法華出少也

庚辰年庚辰月庚辰日庚辰の自庚辰刻

土曜星 今曜星相せしを自也

はありをいししはもむれ殿然るるま

無量昌来今下長久福徳の位上を自也

●せんまき名茶一日用分袋入百四ナリ

日本産を名茶と云ふ法は物可乾あやカク

組化ありり和尙茶の如しこ一少一日百巻

●痔の名茶 文海を名茶と云ふ法は物可乾あやカク

虎の革茶葉茶種を求て是は

呑べし一度切て根を切り再記し

料 ●干し人仕取

定中少量を何升減し能く水る者上

みりこしうまひのよ入まひめき干上して

其の袋又野あぐし是とはのよ旧て

換細糸してま入用し能入用は熟湯

入能くかき入ちてまか砂糖入し人とも

呪

● 人の足もとに踏みかかるといふ呪

其のまじりたるものの上へまじりたるまじりたる十のまじり  
すしてまじりたるを川へも川へも人のまじりたるまじりたる  
捨べし— 忽ちまじりたるまじりたる

● ときがの有りなきをいふ法

みづをうきこしけしこしあしあしをいふ—  
ときがかるハ男女とも一年のちうちうち—

● 婦人下腹注痛にぬす

あつぎきうくろ 糸の 丹まうまじりかん 足も 茶粉やぶ  
能や 4ド— ぬすまじり— あつぎ

